

広島ユネスコ活動奨励賞受賞団体紹介

【学校部門】

■広島市立神崎小学校（校長 高西 実）

～神崎版まちぐるみの教育「笑顔輝け！神崎っ子運動」の推進～

当校は、2013年より学校教育目標に「夢や志を持ち、未来を切り拓く子どもの育成」を掲げ実践を行ってきた。具体的には、目標や行動を明文化した「神崎っ子の誓い」、「神崎っ子の学びのルール」、「躰の三か条」を作成し、教育課程の中に組み込み実践した。

同時に「志高く 美しく」の校訓を新しく制定するとともに、PTAや地域の諸団体にも協力を仰ぎ、「まちぐるみの教育」を提唱した。教育の目指すべき方向性を児童・教職員・保護者に加え、地域の人たちと共有する「笑顔輝け！神崎っ子運動」として、5年間継続して取り組んでいる。

また、2015年には、生きる姿勢について考える道徳教育に力を入れ、校訓のもと、品格と逞しさを兼ね備えた日本人としての感性を身に付けさせるため「神崎っ子の朗唱24編」に取り組んだ。

当校の「神崎版まちぐるみの教育」の活動は、目指すべき子ども像を学校・家庭・地域が共有し、強い連帯と信頼のもと実践を積み重ね、児童の変容や保護者・地域における意識の変化が見られるなど、次世代を担う児童の育成に確かな成果をあげている。

■広島市立三入中学校（校長 竹下 雅祥）

～地域の防災に学び、自助・共助の実践力を育てる～

日本各地において地震や集中豪雨などが多発し、甚大な被害が発生している現在、「防災教育」の実施とその充実は、教育界における喫緊の課題となっている。こうした中、当校はこれまでの「地域貢献活動」の成果もあり、また、「8.20 広島豪雨災害」の被災地となったこともあって、地域住民や団体の協力・支援を全面的に受けて、2014年度から「総合的な学習の時間」において15時間に及ぶ「防災学習」を実施してきている。

その学習内容は、「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の4段階で構成し、生徒一人一人が確かな目的意識のもとに課題を自覚し、課題に対する解決の術や情報を取捨選択して、思考を深め理解できたことを発表するという「より深い学び」につなげていく術を身に付けていくものとなっている。その結果、防災への知識や自覚はもちろんのこと、人命の重さを実感しながら、地域の自然や住民への愛着・地域への参画意識など、地域への視野をより一層深め広げることができている。

地域にあっては、ゲストティーチャーなどで学習活動に参加して生徒を育むことのできる喜びを味わうとともに、中学生が培っている防災や地域活動の担い手としての力を実感しつつ、「8.20 広島豪雨災害」から時間が流れ、薄れがちとなる防災への意識や備えを再認識できる貴重な機会となっている。

■広島県立安古市高等学校（校長 船津 久美）

～広島を愛し、グローバル社会に貢献できる生徒の育成～

当校は、開校（1975年）以来、校訓「仰高」の精神のもとに、グローバル社会に貢献できる人材育成に努めている学校である。特に、2000年の「短期留学派遣」開始以降は、国際的な視野と国際社会で生きることのできる能力や姿勢を育てる活動の一環として、2学年生徒を対象とした「英字新聞」の作成・発行や、オーストラリアの中高一貫校との姉妹校提携による「姉妹校相互交流」を行い、近年においては、「国際協働学習プロジェクト『ESD Food プロジェクト』」「広島創生イノベーションスクール」「ひろしまジュニア国際フォーラム」に参加し、国内外の高等学校などとの交流・協働を積極的に図ってきている。

また、2013年にはユネスコスクールに加盟し、現代社会の諸課題とその解決策を議論・探究・発表する「仰高ゼミ」などのESDに関する活動も推進してきている。

こうした着実に充実した取り組み実績や教職員の教育的姿勢は、文部科学省、ユネスコ・アジア文化センター主催事業である2016年の「サステイナブルスクール」（全国24校）の選定・採択に結び付いている。

※サステイナブルスクール…周辺の学校や地域・家庭を先導してESDの深化に寄与することを目的とした学校。

■公立大学法人広島市立大学 S2（学長 青木 信之）

～食による国際協力と平和活動～

本学にある当クラブは、2009年から多様な平和活動に取り組んでいる。広島平和記念式典における碑巡りでは、3カ月に及ぶ事前準備をして意識の共有化を図り、参加者に碑巡り後のディベートや灯籠流しを通して原爆や平和について考えを深めてもらっている。クラブ内においても岩国米軍基地を見学するなどの研修事業を行い、多角的に考える機会を作ってきた。

また2014年からは、平和の実現に不可欠な要素の一つである「食」を通じた国際貢献への取り組みも始めている。具体的には、大学食堂に登録されたメニューでは1食につき20円が発展途上国の児童給食費に送金されるというTFI制度の導入であり、その広報・集金・送金などの業務を担当している。さらに、フェアトレード商品を使った日本食を提供するイベントを開催していて、2017年にはハラル食材を使ったお好み焼きをムスリムと一緒に作る場を提供した。

この活動は、発展途上国への児童給食支援や平和学習・国際協力に大きく貢献しているものである。

【社会部門】

■広島車いすダンスくらぶ（会長 赤穴 寿子）

～車いすダンスでバリアフリーな社会の創造を目指す活動～

この団体は、車いすダンスを通し「障害のある人もない人も共に希望をもって生きていくひとつの道」となることを目的として1997年に設立し、会員は約30名でその多くが重度障害者である。

障害のある人と健常者がお互いをよく理解し合い、最高のダンスパートナーとなって演じるダンスは、多くの人々の心に感動を与えている。「心安らぐ、最も生きいきと輝ける場所」

「私にはこれしかない」と語る、障害を持つ多くの会員の希望の場である。

メンバーが一番の目標にしている活動は、劇場公演「魂のパフォーマンス」である。その年の成果を披露する輝きの日として毎年開催している。またその活動の場は幅広く、特別支援学校などへ元気を届ける訪問活動、地域イベント参加、車いすダンス普及を目指した無料講習会も行っている。さらに、国際親善交流ではこれまで6カ国を訪問している。

これらの活動の成果として、障害者の社会参加の促進や障害者への理解を深め、バリアフリーな社会の創造につながっていることがあげられる。

■たつじんくらぶ（代表 吉原 通庸）

～伝統文化・芸能を子どもたちに伝える活動～

この団体は、1994年に設立されている。当時は介護保険成立前で、「高齢者社会を生き活きと」をテーマに活動を行っていたが、高齢者からの文化を引き継ぐことを目的とした伝統芸能継承者の育成を始めることとし、2003年より子どもを対象とした活動に移行した。今年度の会員は50名であり、各グループで指導を受ける子どもの数は70名となっている。

具体的な活動としては、能楽、日本舞踊、長唄、三味線、落語、茶道、日本画模写の教室を公民館とともに行っている。開始月は各グループによって異なるが、それぞれ年間10回近く行い、発表会も開催している。アステールプラザ（中区）の「能舞台」で行った能楽、日本舞踊、長唄、三味線の発表会においては、20分間ほど「戦前の広島市の和文化、平和とは？」をテーマとする対談を組み入れ、好評であった。落語は、「広島子ども落語会」として昨年度で10回目の開催となり、250名余りの観客が楽しい時間を過ごすことのできるものとなった。その他、子どもたちは地域活動として敬老会などにも参加している。

成果としては、子どもたちに「和」の心が浸透し、その道を極めようとする者や和服に馴染む者、堂々と人前で発表できる者などが見られ、子どもたちの成長に好影響を与える活動となっている。

■一般社団法人広島ハノーバー友好協会（代表 井内 康輝）

～広島市とハノーバー市との間の人的交流～

前身を広島ハノーバー協会とするこの団体は、現在108名で構成されている。法人化した2013年4月からの6年間を含め、発足した1979年から今日までの39年間にわたって広島市とハノーバー市との国際交流を続けている。1985年に締結された両市の姉妹都市縁組に、それまでの交流が基盤となっていることは特筆される。

この団体は、人的交流を図る目的で、青少年の相互訪問、文化活動の交流、経済活動の交流を活動の柱としている。特に、青少年の相互交流に尽力され、広島市からハノーバー市へ500人、ハノーバー市から200人と、その数は700人を数えていることは注目に値する。

具体的には、青少年のホームステイと文化交流、広島市が開催する「ハノーバーの日」の運営を通じた広島市民へのハノーバー市の紹介、ハノーバー少女合唱隊の来広の支援、フラワーフェスティバルへの参画などの活動を行っている。また、青少年国際平和未来会議の議長を毎年この団体の会長が務めるなど、国際平和都市である広島市の国際交流事業にも貢献している。このような長期にわたる国際交流は、ユネスコ活動の一例として高く評価される。